18、破闇満願

み仏は光明の智慧と寿命の慈悲の覚体であるけれども、愛妻愛子の我等凡夫は無智の無明と如幻の無常の哀れな存在である。無明の闇の心の為に欲を興し、欲の為に業を作り苦しみを増している。闇に向うから増々暗く争いは絶えないのである。而も無常の命を抱えて露と消えねばならぬ果無さを哀れに思召して全徳施名の名号を廻向して下さった時　破闇満願の徳を得るのである。

破満の徳とは、曇鸞大師が名号を如実に聞けば「衆生一切の無明の闇を破し衆生一切の志願を満足せしめ給ふ」と仰せられてあるが、光明無量が届くから破闇の徳が顕れ、寿命無量の徳が届くから満願の徳が彰わるるのである。

之を聖人は和讃に、

無碍光如来の名号と　　かの光明智相とは

無明長夜の闇を破し　　衆生の志願を満てたまふ

と仰せられてあるが、本当に晴れたか、本当に満足が出来たか。疑いの有る事さえも知らずに　自分達は仏様の仰せだから疑うた事はないと平気でいるが、馬鹿の親玉だ。疑うた事のない者に晴れた世界が有らるるか。疑うた事がないのではない、気に掛らないのだ。後生が一大事になっていないから　疑いがどんなものか知らないのだ。疑うた事のない者に晴れた天地が味わえるものかい。凡夫が晴れられるかと言っているが　凡夫には晴れる力は絶対にないのだが、晴らす力が光明無量に有るのだ。凡夫にこれでよいと言う事が有るものかと言う人がいるが、これでよいと言う事がなくてどうして安心が出来るか。仏智が満入して不足が有って堪るか。報謝の側から言えば　身を終るまでこれでよいと言う事はないけれども　信仰の側から言えば　仏智満入の一刹那に足り過ぎているのだ。晴れて満足出来るから聞きなさい。法を見てよし機を見てよし、

人界受生の所栓が顕れているのだ。晴れられもせず、満足も出来ないのは　観念の遊戯に終わっているからだ。如実に聞き得れば信の巻に「今大聖の真説によるに難化の三機難治の三病は大悲の弘誓をたのみ利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治しこれを憐憫して療したまふ」と仰せられて、治療が出来るのだ。然るに世の人は治らぬが自性だ、治して来いとは仰有らないと、悪人正機を平気で侵しているのだ。治そうと言う自覚さえも持たない、悪人正機を乱用している宗教の堕落だ。